

この可哀想なファフニールに優しさを！

まつ壺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不幸にも亡くなってしまった新風灯麻は、死後の世界で女神メルと出逢う。

多忙な選択肢からファフニールを選び異世界へと行つたのだが

……。

「……おはようございます?」

あれ? 俺が思い描いていた異世界はこんなにも……。

目次

プロローグ	1
在り来りな転生	8
○○は最高ですよ	12
ロリコンでも貴方は貴方です	17
始まろうとする日常	22

プロローグ

「新風灯麻さん、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。短い人生でしたが、その生命の灯火は尽きてしまいました」

何にも無い白い部屋の中で告げられた。

一体何が起こっているのか分からずにいる。

……それと、俺の目の前に居るこの美少女は？

そこには、ポツリと一人の女の子が目の前に立っていた。見た感じは、「可愛い」「美しい」「二次元越え」。それになんと言っても、大き過ぎない慎ましい胸。

……はつきり言つて、たまらない。

俺は、いつの間にかその完璧すぎる美少女を「ふむふむ」と思い想いに観察をしていた。

「おお、中々……」

そんな言葉がふと、口から漏れる。

「あ、あのお、そろそろ私の躰を舐め回すように見つめないで下さいますか？」

さつきから黙っていた美少女が、見られている事に羞恥心で頬を真っ赤に染めながら尋ねてきた。

「お構いなく」

「えっ!? い、いやあ、そういう問題ではないのですか……」

今にも泣きそうな顔で訴えてきたので、自分の本能に釘を刺し目を少し別の所に向ける。チラ見位は許してくれるだろう……。

「ふっ、ふうう、あんまり私を驚かせないでください。脆いんですよ私の心は。……よし、言いたい事も言ったので少し別のお話をしましょうか」

俺はコクリと頷いた。いったいどんな話だろうか。

「あなたは先程亡くなつてしまいました。その時の記憶はありますかよね？」

「えっと、確か……何でしたっけ？」

死んでしまっている事は分かっているが、どうやって死んだかは思
い出せないでいた。

「はあああ……まあ、覚えてない方も偶に居ますのであんまり気を落と
さないで下さい」

そう言つて、申し訳なさそうに頭を下げる。 憶えていない俺の方
が悪いと云うのにこの子は……。

「あつ、全然気にしていないので大丈夫です。 それで、少し気になる
事があるのですが……貴方は一体誰ですか？」

美少女は思い出したかの様に、「そうだった」と言い。

「申し遅れてすみません。 そして、初めまして新風灯麻さん。 私
の名はメル。 色んな女神のお手伝い役、万事屋の女神です」

……何を言っているんだ？ コスプレかと思っていたのに。

胡散臭すぎる話をこんな堂々と云えるとは、関心さえ思える。

「何ですか？ 疑っているんですか？」

「はい、その通りです 「女神様」

「ああ、今の言い方！ 完全に信じていないでしょう。 ああもお、分
かった見せてあげる女神つてところをね！」

半泣きになりながら、手に持っていたペロペロキャンディ的なやつ
を宙に浮かせ「ドヤツ」と勝ち誇っているのだが……。

「ぷっ……すっ……い……です」

俺はというと笑いこらえるので大変だった。

「なっ！ ほ、本気を出したら大変な事になるから敢えてだからー！

驚いてくれなかった事に対して、悔しいのか恥ずかしいのか分から
ない感じの表情でそっぽを向いた。

「まあ、見てくれだけは人間離れの可愛さだから認めるよ。 それで、
これから俺はどうなるんだ？」

「今、見てくれだけと言わなかった？」

「言つてない」

相手が人であるかないかは今としてはどうでも良くなっている。

立場とかも今更とやかく言わないだろう。

「はあああ、もういいわ。 それで、あなたの今後はと言うとねえ

……。二つほど選択肢があります。」

「二つねえ……」

「はい、一つは人間として再び生き、新たな人生を歩むか。もう二つは、天国的な環境でのほほくんと暮らしをするか」

のほほくんって……。本当にそんな感じなのか？

「生まれ変わりか天国で暮らすか、まだ日本でやり残した事があったのになあ」

「それって、えっちな事ですよね？」

うっ、的確に当ててきやがる。

そんな恥ずかしそうに頬を赤らめている俺を見て、妖艶な笑みを浮かべ。

「そうでしょうね、男の子だもんね。君が考えている事なんか手に取るように分かるわ。……。そうねえ、もしもの話だけど。」

そこまで、言って顔をぐっと近づけ嬉しそうに言った。

「異世界へ行けるとしたら、あなたは行きたい？」

異世界。それは、日本に居た時とは違う生活が強いられる。

メルの説明では、多種の世界のその一つ。勇者も魔王も居て、剣技や魔法でモンスターを倒して生活などをしていくらしい。

分かり易くしたら、異世界チート系の小説と思えば合っていると思う。

「もし、行くとしたらちゃんとした特典もあるわよ。それに死ぬ前にえっちな事がしたかっただけ？ それも叶うわよ！」

「なっ、そ、そんな事は断じて……。ないかと思えます」

思春期真盛りの俺としては、完璧に否定は出来ないってのに……。

「それがねえ、なんと肉体と記憶はそのまま送ってあげる事になっているの。尚且つ、あなたみたいな人はすぐ死ぬと思うから、何か一つだけは、特殊能力や才能やとんでも武器をプレゼントして頑張ってきてねえって感じなの。どう？ どう！ 楽しそうでしょ」

異世界系が好きな俺には良い話に思える。

でも、一つ持って行けるとしたら何にしよう……。

ファンタジーゲームをやっていた頃は、魔法剣士をカンストまで育

成していたし才能がいいだろうか。

あつ、決める前に。

「あつちの世界って日本語で通じるのか？」

「そんな訳ないでしょ。今まで居た世界は日本語で大丈夫だったけど、あなたが行くのは別の世界。そこにも、歴史や文化があったのよ。簡単に言うとな外国へ旅行だ的な感じかな」

異世界ってそんな気楽に行けるところなの？

まあ、女神様だからこそその価値観かも知れないが。

「でも、安心していいわよ。君の脳を少しだけ弄って無理矢理にでも覚えさせるから」

「何が、安心してだ。こっちは、逆に恐怖さえ感じているぞ」

「怖くない大丈夫よ。だって、女神ですから。だから、安心してどれにするか決めちゃいなさい。」

そう、言っただけの目の前にメルがカタログの様な物を差し出した。

メルからカタログを受け取ると、一つ一つに目を通していく。多様な公式チートの中から何にしようか……。

《ゲイ・ボルグ》《直死の魔眼》《最古の魔力》《スマホ》……スマホとは？

終盤の辺りから、ネタに走っているとかわせる様な物が書いてある。

ネタを選んだ暁にはどんなドン底異世界ライフが待っているのだろうか……。

そんな事を思いながらいつの間にか読み終えてしまっていた。

どれか一つだもんなあ……本当にどうしょ。

「考えているわねえ、いつもならはやくして欲しいのだけど。今日は死人も少ないから好きなだけ選んでいいわよ」

仕事が少ないって嬉しいのかニコニコとしているメルは、「一応これも」と二冊目のカタログを差し出してきた。

「これは？」

「ああ、それね。こう言ったら悪いけど全く選んでももらえないから、こうやって別冊に移し替えているのよ。変わり者のあなたなら選

ぶかなあつと思つて」

何その言い方、酷い。

メルという言葉に若干傷つきながらも受け取ったカタログをパラパラと捲ってみる。

……うーん、選ばれない理由が何となく分かつてしまう。

そこには、一目見れば強いと思うものの。 やり過ぎている物や欠陥がある物ばかりで実用性に欠けている。

「何でこんな物を作ったかわからない物まで入っているぞ。 ほら、このアクシズ教ストラクチャセットとか……」

「あくそれは、現在出張中のアクア様が考えた物で、見たら分かるけど使い道も意味不明だからすぐ取り下げただけだよねえ……。 そこからが大変だったのよ……」

昔の事を思い出したのか、凄く疲れた顔で同情を求めてきた。

女神を困らせる女神か……。一度会ってみたいな。

それからたまに、メルの説明を入れ十分が経とうとして終わりのページに差し掛かった時、一つの生き物に辿り着いた。

《金焰龍ファフニール》

そんなインパクト塗れの生き物に……。

「えっ、ファフニールってあのファフニールですよね!!」

「うん、あのファフニールよ。 でも、それがどうしたの?」

あれ? それがと言っているがファフニールって人気じゃないのか? それに、ここに書いてあるのは実用性に欠けている物ではなかったのか? ファフニールさえ居れば打倒魔王も簡単そうに見えるが……。

「このファフニールって何で最初のカatalogに入っていないの? チート級の破壊力や物凄い大きさとかで…….……ん? 大きさ?」

その言葉を待っていましたと言わんばかりにメルは胸を張って言ってきた。

「それがファフニールの最大のネックなのよ! あなたが思っている以上に凄く大きくて歩いているだけでも街が崩壊出来るぐらいにね」
ええ、怖。 ファフニール怖!

「で、でも、普段は街の外に居させて、冒険に行く時だけ呼ぶとかは……どうですか?」

「はあ、それも無理ね。あの子とてつもない寂しがり屋でご主人様と少しだけでも離れると寂しくて街に乗り込んで来ちゃうの」

もう、ずちなしな事を言っている気がする。

……気ではなくて結果論か。

「それじゃあ、仕方がないですね」

「まあ、そうね。でも、この子可哀想なの……。何十年間も誰も選んでくれなくて可哀想に思った転生の女神様がファフニールを人間にしてあげようと相談をしたのだけど、「私は待ち続けます」と言っただけから何年もの月日が経ったの」

メルの話聞きながら何度も胸を引き裂かれそうになる。カタログに書いてある物でも選ばれるまでの過程もありの重要な選択肢だったのかと思ひ知らされる。

そして、ふとこんな事を思い出した。

……一つ持つて行けるとしたら何にしよう。

もう、決まっちゃった。

二冊目のカタログを受け取った時から決まっていたのかも知れない。それこそ運命!!

「興味半分で渡してごめんなさいね。じゃあ、二枚目のカタログは片付けて一枚目の方で決めちゃいなさい」

メルは俺が手に持つていた二枚目のカタログを取ろうとするが、中々取れず「ねえ、何やってるの?」と焦りながら言ってきた。

「メル! ……いいや、女神様。俺、このファフニールにするよ!」

「えっ? ……えええ!! ほんと? 本当に?」

「うん、もう決めたんだ。この子にする……この子を幸せにするんだって!」

無理矢理で強引な俺の言語にメルは朗らかな笑みを浮かべ。

「分かったわ、その気持ちしかと受け取ったわ。ファフニールを大切にしておね」

「はい! 幸せな旅にします」

俺はグツと拳を握りしめた。どんなに大変な旅だろうがいつか笑い飛ばせる……そんな、旅にしよう。

「それじゃ、この魔法陣の中央から出ない様にしてね。魔王を討伐してくれる事を楽しみにしているわ」

魔王討伐かあ……うん、何だか行けそうな気がしてきた。

「ああ、分かった。俺とファフニールで魔王を討ち取ってくるから、待っていてくれ女神様」

「はい、楽しみに待っていますよ。それと、あと一言」

メルは俺にとびきりの笑みで最後の言葉を告げる。

「さあ、勇者よ！ 願わくば、数多の勇者候補達の中から、あなたが魔王を打ち倒す事を心から祈っています。……さあ、旅立ちなさい！」

メルの別れを惜しみながら眩しい光に包まれた……。

在り来りな転生

「……………ここが、異世界なのか?」

パツと見た感じは異世界感ゼロですけど……。

それもそのはず、キョロキョロと見渡したが木と草で生い茂っているだけで、人もモンスターも寂しがり屋のフアフニールさえ見当たらない。

ただの草原に転生されたのか??

おいおいおい! 俺の異世界ライフはどうなったんだよ!?

目覚めて一瞬で世界観が終わる異世界物語って誰得だよ!?

慌てる俺に止めてくれる人が居る訳なく、パニック状態に陥っていた。

「もしかしたら、ここは異世界では無く。日本の何処かの田舎とか

で俺は誰にも認知されずに転生されたって感じなのか!」

ある意味他の人から見たら滑稽に見えるだろう……。

そんな振り切れない気持ちに悩まされていた時、俺は一つ気づいた事がある。

「……………えっ?」

……………俺、宙に浮いてね?

不自然にふわあつと浮いた身体は重力と言う理不尽な掟に逆らうことが出来ず、頭から地面へとダイブしていた。

ゴフウ!?

「なっ! ああ、あつたーまがあつたーまが!!」

落ちた衝撃と痛みで今自分がどんな状況下に居るのかはつきり分からない。 てか、一体何があつたら俺が宙に舞う事になるの!?

痛む頭を押さえながらその場にムクリと座る。そして、知性の少ない頭で考えてみる。

まあ、理解不可能な事が起きたって事はここが異世界と言えるだろう。魔法とかの類だろうか? 狙われては……ないだろう。

正解に近づけようとするがこの世界の知識が不十分だ。

「何か『証拠』的な物が無いのかな? それさえ見つかればこの謎も解

決するのだが……」

そう言いながら、草の上に大の字で寝転ぶ。

そして、後悔した。

後悔した理由は単純だ。宙に浮いた原因が分かったから……。

「oh……。嘘だろ？」

「グルウウヴウウガアルルヴウウウ」

至近距離の俺に耳を劈く勢いで咆哮を飛ばしてきた。多分、この

子がメルが言っていた黄焰龍ファフニールだろう。

出逢えた事に嬉しさもあり、鼓膜を破られた事もありで、何とも言えない感情に悩まされている。……この後パクリとされないだろうな。

「な、なあ、言葉……分かるか？」

「グルウウヴウ？」

やっぱり、種族が違うだけで会話も成り立たないか、しようがない

……別のコミュニケーションの取り方を変えてみよう。

「フンツフンツフン」

「ガルウ？」

……ジェスチャーを試してみたが通じないな。

どうすればいいんだよ!? 俺は頭を抱えながら脳内に訴えかけた。

そんな悩んでいる俺の隣でファフニールは静かに土に向かって爪を突き刺し始めた。

どうしたんだろう? 遊んでいるのかな?

何もする事もないのでファフニールの謎の行動ただただボオーと見守っていた。暇なのである。

ザクザクと豪快な音を出しながら土を抉っていくのを見ているが、音フェチの俺としては、その音にうっとりとしてしまって時間さえ忘れる程だ。それに、ファフニールは爪先で『初めまして』と書いている……うむ、なんと……き、よ……うな!?

おい、まじイかヨ?

唐突の事に俺は口を半開きにする事しか出来なかった。そんな俺に対してファフニールは「ガルウヴウ!」と唸って少し嬉しそうに

尻尾をバタバタと地面に叩きつけていた。

「おまつ、おまつ、お前つて言葉での会話は出来ないが、文字系統では通じ合えるのか？」

「そう言い放つと再び土に向かって爪を突き刺した。

ん？ 何だ何だ？」

『そうです この声帯では普通に会話すら出来ないのです すみませんご主人様 』

「ご、ご主人様…だと…？」

そんな感じなのかと首を傾げる。 自分的には旅の同僚的だと思っていたが違ったのかな？

「まあ、話せなくても通じ合える事が分かったから、良かったのかな。

うん、これから宜しくなファフニール」

『はい 宜しくお願ひします 後 まだ私には名前が無いので考えてくれますか 』

さつきと違って意気揚々と凄いスピードで地面に文字を描いている。 今までの、慣れていない感じは何処へ……。

「名前かあ…。 こんなのが良いって思うのがある？」

『ご主人様が決めてくれるなら 何でもいいですよ、～*』

俺が決める名前なら何でもいいのかあ。 それにプラスして、絵文字まで入れてくれるなんて……。

もう、泣きそうです。

「本当にいい子だなあ。 うーん、もっと親しくするには……あつ、そうだ。 なあ、君の名前を考えている間にこの世界に来るまでの話でも聞く？」

『はい お願い致します 興味深いです 』

軽く唸って合図を送ってくれる。

よし、この子に似合う名前と飽きさせない愉快な話を！

そして、すつと息を吸い込み話し始めた。 ファフニールに出逢うまでの話や日本に居た頃の話、どれも出来る限り詳しく話した。 自分という名の『生き物』を分かってもらおう為に……。

「そうそう、そしたらメルが……って言っていて」
『メルって あの時の事まで話していたの!?!』

一人の人間と一匹のフアフニールの会話は何時間にも及んだ。

「はあ、こんなに話したのは久しぶりだよ……。でも話せて良かったと思うよ!」

予想以上に話したから結構な疲れが押し寄せて来たが、何と云えば良いだろう……。とても幸せと想うこの気持ちを。

『私も本当に楽しかったです。ちよくちよく唸ってしまつて恥ずかしいです』

……唸るって恥ずかしい時に使う感情表現なのか?

出会った時から聞いていたが、あまり変化が分からなかった。

「ふああ……。ごめん、流石に色々とありすぎて眠たくなってきた。今日はこれぐらいにして明日話の続きをしない?」

フアフニールも同じなのか疲れた様に首を振る。

『分かりましたご主人様 私も眠くなったので眠らせてもらいます
それでは おやすみなさい』

書き終えたと同時にフアフニールは楽な姿勢で目を瞑る。

「キョールウルウルウ……。フウー」って寝るのはや!?

そんな気持ち良さそうなフアフニールを横目に自分も目を閉じる。
閉じるまでは良かったが、やっぱり異世界へ来たという興奮で寝付けないでいた。眠たいのは確かなのに……。

「ああ、明日から楽しみなあ……。これからの異世界旅はどうなるのかな?」

そう思つて再び目を閉じたが……。逆効果だったので後悔した。

○○は最高ですよ

「ふうわあああ……。　　こは？」

目を擦りながら見慣れない世界を見渡す。

……て言うか転生してきたんだ。

昨日の事を思い出し何があったのか理解した。　俺って本当にこの異世界で生活をするんだよなあ……。

思い直すと知りもしない異世界に来たのだと。　寂しくも感じる

が、大丈夫……。俺にはファフニールが居る。

何を悩む必要がある。　それに幸せにすると決めたじゃないか。

そう思い、ファフニールの方へ顔を向ける。

「うんんんんんん!?　　ううんんんんんん?!?!」

あれあれ?　まだ、夢の中にいるのかな?

今の状況を分かる限り説明すると。

昨日までファフニールが居た場所に、小柄で艶色の幼女が気持ち良さそうに眠っていた。

それも、裸体で……。

ああ、寝ている間に誘拐でもしたのかな?

半分以上諦めモードで明日の空を眺める。　俺の異世界物語は

ファフニールとの出逢いで終わってしまうのか。

そんな事をしみじみと思い馳せていた時だった。

「…………おはようございませう?」

疑問形で尋ねられて「はう!」と変な声が出てしまったが、どうしよう……。起こしてしまったようだ。

さっきの俺と同じく眠たそうに目を擦りながら、たじろいでいる俺を見て不思議そうに首を傾げている。

……お願い!　顔を確認しようとしなないで!!

顔バレしない様に両手で顔を隠し、ちよこちよここと幼女から距離を取ろうと行動しているだが。

「何処に行こうとしているの?」

ぎゅっと袖を握られ逃げられないようにされている。　それに、こ

の子なんと桁外れの握力を持っているのだ!? 子供に力で負けているなんて。

「違う!・これは誤解なのだ!! 決して俺は誘拐などは……」

「誘拐?・何を言っているんですか?」

「何をつて……これ誰が見ても誘拐だよ!?!」

「ゆうかい……。 あつ、違いますよ!?! これはですね、ご主人様」

そこまで言うとしり恥ずかしそうに幼女も顔を隠す。

顔を隠すより身体の方を隠して欲しいが……。

……あれ?・ご主人様?

何処かで聞いたような言葉だなあ……。

その記憶残りの言葉を思い出そうと考え始めたが、答えが出るよりも先に幼女が口を開く。

「フアフニールって言ったら分かりますか?」

「ごめん、全く分からん」

「ええ!?!」と幼女は叫び、分かってももらえなくて寂しいのかその場に伏した。

悲しそうにしているが俺が知っているフアフニールは、厳つような顔や強大な角、それになんと言っても計り知れない程の巨体。

一個も当てはまらない……。

「大丈夫だよ。 お兄さんはここから街に行つて君の保護とお務めを果たしに行きたいけど、道分かる?」

「お務め!?! 何でご主人様が!?!」

「仕方がないよ……。 ああ、もつとフアフニールと居たかつたな」

幼女はアワアワと慌て始めた。

無理に連れてきたから道が分からないのだろうか?

「どうしましょ、どうしましょ!・ご主人様が!」

さつきも言っていたがこの子は何で俺の事をご主人様と? フアフニールもそうだったけどこの異世界は相手の事をご主人様と言わないといけない法律でもあるのだろうか。

そして、一つ一つ思い出すと次々と疑問が。

この子をよく見たら頭に角? 見たいのが生えている……つて尻尾

まで!?

そこまで考え昨日のファフニールと比較してみる。

角は確か二本だったな。この子もか……。

目の色は……青。同じか。

髪は比べようがない。

そして最後に尻尾か、模様も色も同じと……。

ん? 流石に似過ぎではないか?

全て出した結果で再びこの子とファフニールを照らし合わせる。

「もしかして……ファフニールなのか?」

ポツリと呟く声を聞き逃さなかった幼女が、ニパアと物凄い嬉しそうに笑顔を振りまき。

「やつと、気付いてくれたのですか……」

とポツポツと涙を零していく。やばい、泣かせてしまった。

「だつ、大丈夫? ごめんな、気付いてやれなくて。御主人失格だな」

「もう、いいじゃないですか。こうやって逢えて分かり合えたなら」
そう言い、涙を拭き取り笑顔のまま俺に飛びついて来た。

絵面的にはアウトだが他には誰も居ないしこんな日もあつてもいいだろう。

でも、裸体で居させるのは自己的にもアウトの上限を超え過ぎてるので自分が着ていた服の一枚を着せる事した。

こうやって、こうして。

うん! 着せてみたが、上も下も隠せていて、見えてはいけない所も上手く隠せているのがポイントだな。

「ご主人様の香ばしい匂いがします」

俺の服をクンクンと匂い感想を述べてくれるのはいいが……。

何時から着ていたかもしれない服で昨日汗もかいてしまつてるので恥ずかしいからあんまり匂わないで欲しいが……。

まあ、いいか。

嬉しそうなファフニールを見ながら幸せを噛み締める。異世界に来て一日ちよつとでこんなにも壮大な物語が待っているとは。

だが、最大の謎が一つ残っているのである。

『何故、ファフニールは擬人化したのか』

「やっぱり、気になりますかこの身体？」

「おっと、見つめ過ぎたようだ。」

「まあ、昨日までドラゴンだったのに朝起きたら少女が寝ているんだから気にもなるよ」

「もしかして、少女はお嫌いですか？」

「えっ？ どうして？」

ファフニールは困った様に。

「ご主人様の好みに合わせて頼んだのですか……お気に召さなかったのでしょうか……」

「もしかして、頼んだのはあの時話した転生の女神にか？」

「はい！ ご主人様をずっと外に居させるのも悪いですし、なので頼んでみたら笑顔で「ok」と言ってくれました！」

女神様がそんな軽く許可していいのかよ……。

しかし、転生してくれたお陰でより一緒に過ごせる様になったな。

礼ぐらいは言わせて欲しい。

「……それで、先程の話ですけど。少女はお嫌いですか？」

「ねえ、ファフニール？ 答えないとイケない？」

「……はい。 答えてください」

ええ、急に怖声になったけど……。 そんなに重要なのか!?

「好きと言われたら好きな部類に入るかな……」

「答えが曖昧ですねえ。 何で？」

怖い怖い怖い！ ドラゴンでもそういう属性があるのか!?

さっきからファフニールが真顔でジリジリと詰め寄って来ているのだからどうしよう……。

「もう、分かったから！ 詰め寄らないで！ 好きだよ、好きですよ！」

「そうですよね！ 思っていた通りで安心しました」

本当に一体どうしたんだよ、ガチの恐怖を味わったぞ。

「ふう」と胸を撫で下ろす。 今後はこの話題は避けた方がいいな。

「じゃあ、これで二度目になるけどこれから宜しくな」

「私からも宜しく願います!」

俺もフアフニールもニコニコになり、初めの頃の初々しさが戻ってきたかの様に感じた。

そして、始まるんだ俺達の異世界物語が。

「でも、これからどうすればいいんだろう?」

「それなら、あの山を越えた先に『アクセル』という名の街がありますので行ってみますか?」

アクセルかあ……。 そうだな、まずは暮らしの拠点となる所を探した方がいいかもな。

「今から行くとしたら何時頃に着くのだ? それと、今の所は見渡してもモンスターを見付けられないが出てきた時に大丈夫なのか?」

「今からなら……。一日程度です。 モンスターは多分大丈夫だと思います」

多分でも此処にずっと居るよりかマシだろう。

よし、それでは行こうか『アクセル』へ!

ロリコンでも貴方は貴方です

「……はあああ。　ここで合っているかい？」

「はい、やっと来れましたね……アクセルに」

疲れた表情で俺とファフニールは顔を合わせる。　一日程度だけで着くはずだったが色んな妨害を受け、結局的には二日も掛かってしまった。

時には黒い狼みたいな奴に追っかけられたり、時には腹減りで死にそうになるわけで本当に大変な目に遭った。

「あの人は大丈夫だったんでしょっか？」

ふと、ファフニールは先程まで冒険者とモンスターが戦っていた方へ視線を向ける。

大丈夫かと問われたら「勿論だよ」と言いたいところだけど、さっきの人はねえ……。

正直に言うと、あれは酷かった。

アクセルへ向かっている時の話になるが、巨大なカエル的なモンスターに完膚なきまでに負けているパーティーを目の当たりにした。

三人程だと思うけど、一人は呑み込まれ、もう一人は地面に寝そべり、最後の一人は剣を片手に呑み込まれた仲間を救い出していた。

俺達には武器もなく仮にもファフニール（幼女化）が居るが、危ない事はして欲しくなかったので、最終的には見捨てる形になってしまったのだが。

……多分助かっただろう。

「冒険者だから今頃は倒していると思うよ……」

「そうなってくれている事を祈りたいですね……」

門の壁に寄り添いながら話し合っていたが、門番がこっちを見ながら「はよ入れ」と唆してきたので考えるのをやめ街の中へ入る事にした。

手続きは難なく進み簡単に入れた。

門を潜り抜けるとそこにはファンタジー感溢れる街並みが目に飛

び込んできた。感動もしつつ街の中へ歩いて行く。

「こうやって見ると、本当に異世界に来たんだと実感するな……」

「嬉しそうですね、ご主人様！」

気持ちが高ぶっている俺を見て、ファフニールも嬉しそうに尻尾をバタバタと地面に叩きつけていた。

「おお、ファフニールも分かるか。よし、まずはこの世界の情報集めと冒険者になる為の手続きをしようと思うけど、どう？」

ファフニールも賛成してくれたのか頷いてくれた。

情報集めと手続きだよな……異世界なのだからギルドもあるよな。そう思い、ギルドへ向おうとしたのだが。

……ミチガワカリマセン。

「なあ、ファフニール。ギルドへの道のりって知っているか？」

「私も初めて来たので把握していません」

「うくん、そうだよな。ここは無難に冒険者の格好をしている人に聞いてみるか」

この豆腐メンタルで何処まで話せるかが未確定だが、聞いてみない限り動けないので話し掛けてみる事にした。

誰か居ないかと辺りを見渡す。

人間以外にもエルフや獣耳っ娘など異種族の冒険者らしき人達も居る。誰に話し掛けようか悩みながら眺めていたら冒険者達はあ
る一点場所に向かっていた。

あれ？ この人達に付いていけば話さなくてもギルドに着くかない？

さつきまでの意気込みを少し恥ずかしく思い、もじもじと手をこねる。でも、場所が分かったから良かったのかな？

「よし、ファフニールよ。我について来るがよい」

「ご主人様……急なキャラ変するならもつと堂々として下さい」

異世界と言う名の高揚感でつい何処かの魔王風に演じてみたが、流石に無理があり恥ずかしさの圧でファフニールから目を逸らす。

ファフニールも曖昧な顔でこちらを見てくる。

……逸早くこの場から去りたいです。

そして、冒険者ギルドへ。

開かれた扉は緊張と期待で重みを増していた。

中には仕事を求める者や食を楽しむ者と別途の要件で来ている人もいて、皆様々な感情で溢れていた。

「おお、すつげえよ！　これがギルドか、何だがテンションが上がってくるな」

興奮気味で色々と見ていた俺は、ファフニールの肩を摩って気持ち爆発させていた。

「あつちが食事処でそつちはクエストを受ける所かな？」

「そうですよ」

「ん？」

隣から見知らぬお姉さんが、愛想よく話し掛けてきた。

「あつ、すみません。私はこのギルドの案内役をさせてもらっています。初めて見るお顔だったので困っているのではないかと伺ってみました」

「そうでしたか、これはご親切に。あの僕達冒険者になりたいと思いが来たんですが、どうすればいいですか？」

「その為の私ですよ。あちらのカウンターへ向かって下さい」

促された通り奥には四人の受付が座っており、暇なのかこちらに手を振ってくる。

それも、四人とも。

……素直に怖いよ。

「あの人達って何でこつちに手を振ってくるのですか……」

「いつも忙しいのと苦情とかで、精神がやられたのではないですか？」

本当であれば相当きつそうだな冒険者ギルドの仕事って……。

「ありがとうございます」と言い残して、カウンターへと歩いて行く。

行っている途中何人も「おい、あいつ幼女を引き連れているぜ」とそんな声が聞こえてくるが、俺はロリコンでは無い……この子の親代わりだ。

「私はご主人様がロリコンでも大丈夫ですよ?」

「すまないがファフニール。問題はそこじゃないんだよ……」

俺は情けなさそうにファフニールに顔を向ける。流石にこのギルドの人達にそんな噂が広まったら居場所無くなってしまう。

「……あの、宜しいでしょうか?」

話し合っていて気付かなかったが、振り返るとほんの数センチの距離に女性職員の顔があった。

クツキリとした顔付に長髪の赤毛の髪の毛。美人かと皆に聞けば誰もが美人と答えるだろう。

異世界の人って日本にいた時より美人が多く感じるけど、そう思っているのは俺だけかな?

「えつとですね。冒険者になりたいんですが、そういう事に自分疎いので教えてくれませんか?」

申し訳なさそうにする。知らない物は知らないのだ。

「はい、いいですよ。まずは、登録手数料が掛かりますがよろしいですか?」

ンン?アレ?手数料?

この世界で初めて聞く金銭関係に戸惑いを隠せずにした。

「もしかしてですけど……お持ちにならないのでは?」
「ちよつと待ってください!?!」

手をかざして相手の言葉を遮る。

ヤバイ!ヤバイ! どうしたらいい!?

焦る俺にどう話し掛ければいいのか、女性職員もアワアワと慌て始めた。これが、負の連鎖と言う物だろうか。

感情は焦っているのに脳内はクリアなのはアレだが、本当に焦っています。

「大丈夫ですか?」

「ファフニール……心配を掛けさせてすまない。ここは俺がどうにかしてみせるよ」

グツと拳を握り意を決する。頭を下げた誰かにお金を貸してもらおうと……。

始まろうとする日常

「……はい。確かに登録手数料は受け取りました。冒険者を希望でしたので少しお話を。冒険者の役割は知っているとありますがモンスターを倒すだけではなく依頼を受けてそれを遂行する物もあります。スタイル的には依頼型が多いと思いますので最初はそこからやり始めたらいいと思います」

さっきの事もあり女性職員は最初の辺りはたじろいでいたが、スグに調子を持ち直し内容を話してくれた。

ふむふむ、依頼型か……。薬草収集とか荷物届けなどの雑用をする感じだろうか？ それ以外に出すとしたらレアモンスターやレジェンド級のモンスター討伐……。初心者には無理がありすぎるな。

「それもそうですね。じゃあ、まず初心者でも行けるクエストを教えてくださいませんか？」

「分かりま……ちよつと待って下さい。忘れている事ありませんか」

ん？ 忘れている事か？

武器とか防具などを装備していないとかだろうか？

「あつ、大丈夫ですよ。さつき程貰ったお金で多分買い揃えますから」

手を振り、相手の気遣いに遠回しで答える。

そうだよな、装備が無いとまた死ぬはめになってしまうからな……。

「お、おちよくつっているのですか？ 職業ですよしよきよう！」

困惑気味で言っただけで俺とファフニールにカードを差し出した。

場違いの事を言っただけで恥ずかしながらカードを見る。

カードには力、生命力と書かれている。もしかしてこれは……。

「それは、あなた達のステータスが記されるカードとなります。

知っていると思いますが、生き物誰でもその身に魂を宿しています。

その、魂を食したり殺したりすると経験値が貰えあなた達の力となります」

ゲームでいう所の経験値をゲットしてレベルアップしますよって事かな。そこで解釈して思う事がある、ファフニールはどのくらい育っているのかを。

疑問気味の目をファフニールに向ける。

「どうしましたか？ 疑問になる事でもありましたか？」

あるには、あるけど……どのみち、このカードを使えば分かることか。

「……あの、どうやったらいいのでしょうか？」

「その前にこの書類に記述を書いてくれませんか……」

女性職員は呆れたようにトントンとカードをつついている。

その方を見ると、名前や年齢を記入する欄が見受けられる。書けて事だよな……。

二度目のミスを頬をかきながら流す。そして、思う。もつこの世界の事を知ろうと。

「年齢は……17で。これで、全部書けたかな。……ん？ どうしたファフニール？」

書き終えてペンを置き、ファフニールを見る。見られたファフ

ニールは俺に戸惑いの顔で何かを訴えてくる。

「ここを……」

「ん？ その項目はつと……。名前を記入。うくん、これはあれだファフニール。本当にすまないと思っている」

そう、これはあの時に決めないといけなかった事だ。『ファフ

ニールの名前を』

「決めてない？ 決めてくれない？ ん？」

「いやいや、ちよつと待ってください。言い訳になるけれど、決めていたは決めていたんだ。でも、いいタイミングで言いたかったのだ」

と言いながら、手でファフニールを抑制する。

決めようと努力はしていたが、候補を出しては取り止めてを何回も繰り返し気付けば今になってしまった。アクセルに向かう途中は何ともなかったが街に入った辺りからだろうか、ファフニールがむず

むずとしてきたのは。

「なら今すぐにも言えますよね？　どうぞ、この場で……」

ファフニールは俺にさあさあと急かすかのように声を張り上げる。

その声に釣られたのか奥の方で飲食していた人達が顔を覗かせ始め、数分後には全員と言つていい程の人数にまで膨れ上がっていた。

……マジか。

その一言に尽きた。

いつの間にか外野から「おいおい、兄ちゃん。それでもその子の保護者か」や「無名なんて酷いなあ、兄ちゃんは」など批判の声か耳を通り過ぎていく。

まるで、地獄のようだ……。

語力の崩壊。

誰か俺を助けて下さい……。

震える身体を意地で保たせる。　こんな群衆に見られ、耐えられる方がおかしいものだ。　だから、この環境から早く抜け出す為に俺は大きく息を吸い込み、意を決する。

「ファッフアフニール。　お前の名は、テイ、いや、シュ、いや違うな

……。　ノ……ああ、ノイレ。　お前はノイレだ！」

俺はキメ顔でそう言った。

言えたはいいが、元ファフニールも冒険者達も押し黙る。　この謎の静寂が俺を段々と不安に追い込んでいく。

不自然な間に耐え切れなくなった俺はファフニールの目を見て語りかける。

「もしかして、嫌だったか？　プルプルと震えて……すまない」

申し訳なく、頭を下げる。　あの時は何でもいいと言ってくれたが、誰にも気に障るものがあるのだ。

そして、俺はゆっくりと頭を上げる。　そこでファフニールの顔を見た。　見たんだ。　あのとびっきりの笑顔を。

「あれ？　……ファフニールさん？　怒っているのではないのですか？」

「ご主人様は何を言っているんですか？ 私は嬉しかったのです。初めての名前。私だけの名前。この嬉しさの感情の度量が分かりますか！ あっ、それと、私はノイレですよ！」
本当に嬉しそうにピョンピョンと跳ねている。そして、止まったかと思うと次は尻尾を叩きつけ始めた。

バシン、バシンと鈍い音がギルドに響き渡る。
そうか、そうだったのか……。嬉しかったのか。

湧き上がる気持ちを抑え込む、本当にこの世界は不思議で謎が深い。まあ、それが良いのだが。

「よし、ノイレ。その項目を書いて次のステップに進むぞ」
「はい、お任せ下さい！」

再び、ペンを持ち『ノイレ』と書いていく。正式な名前なので問題は無いだろう。

「やっと、俺達のステータスが判明するんだな。どんな能力があるのだろうか？」

やっと、異世界ファンタジー感が出てきて、ワクワクが止まらないでいる。

なのだが、少し気になる点がある。

「なあ、ノイレ。ギルドに俺達以外にも人が居るだろ？ なのに何故、周りの冒険者達は無言のままなんだ？」

さっきまで、俺を煽っていたのにどうしたのか？

ノイレも首を傾げ、周りを見る。

「異様な空気を感じますね……」

そう呟き、焦点を俺に向けチョンつと裾を握る。安心するのか握ったと同時に表情が朗らかになる。

いつまで経っても誰も話す事なく時間だけが過ぎていく。

結局、痺れを切らした俺は女性職員に尋ねた。

「あの……どうしましたか？ 皆さん黙ってしまったのですが、何か問題でもありましたか？」

聞かれた職員もキョトンとしていて、無言の数秒が過ぎていく。

……

「あつ……。すみません、ちよつと言ってはいけない言葉が聴こえましたので、少しフリーズしてました」

フリーズって……。ロボットかよ。

そんな、くだらない言葉を思い浮かべる。

「なら、周りのこの状況も?」

「多分……。そうなりますね」

曖昧な答えだが、やっと話してくれる人が居て少し安心していた。無言状態が続く謎の異様感で溢れていた。ノイレが感じていた事と似ているだろう。

そして、疑問になる点を見つけた。言ってはいけない言葉とは一体何なの?

俺は『ん?』と言いたげに女性職員を見る。

「……気付いていなかったのですか? あなたがさつき言った事ですよ。『ノイレ』と名づけましたよね?」

ああ、確かに『ノイレ』と名づけたが……禁句の言葉だったのか? 「もしかして、唱えてはいけない禁呪の呪文とかなのか!」

「すみません、何が言いたいのか理解できません」

即答だった。他の黙っている人も『何だこいつ』みたいな目で見てる。

……ねえ、何? この空間?

「えーと……ですなえ。世間知らずのあなたでも分かるように説明するとですね。昔、ノイレと呼ばれていたドラゴンが存在しました」

「今、何で世間知らずと言った!?!」

「……………」

おい……。

「……ノイレと言う名は、数千年前の勇者が付けた名前と言われています。それで、勇者とノイレは奇跡的な出逢いをしました。その出逢いの最中に一つの契約をしたのですが、問題はここなのです!」

俺の目の前にビシツと人差し指を突き出してきた。ここからがメインと言いたそうに勢いでしてきたのでビクツと身体が反応した。

「問題とは？」

「えーと、その先に関する情報が曖昧で色んな説があり、イマイチなんですよ」

「……え？」

「……うん、そのノイレと勇者の出逢いは分かったですが、『ノイレ』が言っただけじゃない言葉となった理由は？」

そう伝えると、アワアワと焦り始めた職員は考え込み始めた。それに釣られるように他の人達も考え込む……。

「「「理由は知らない」「」」」

「……どゆこと？」